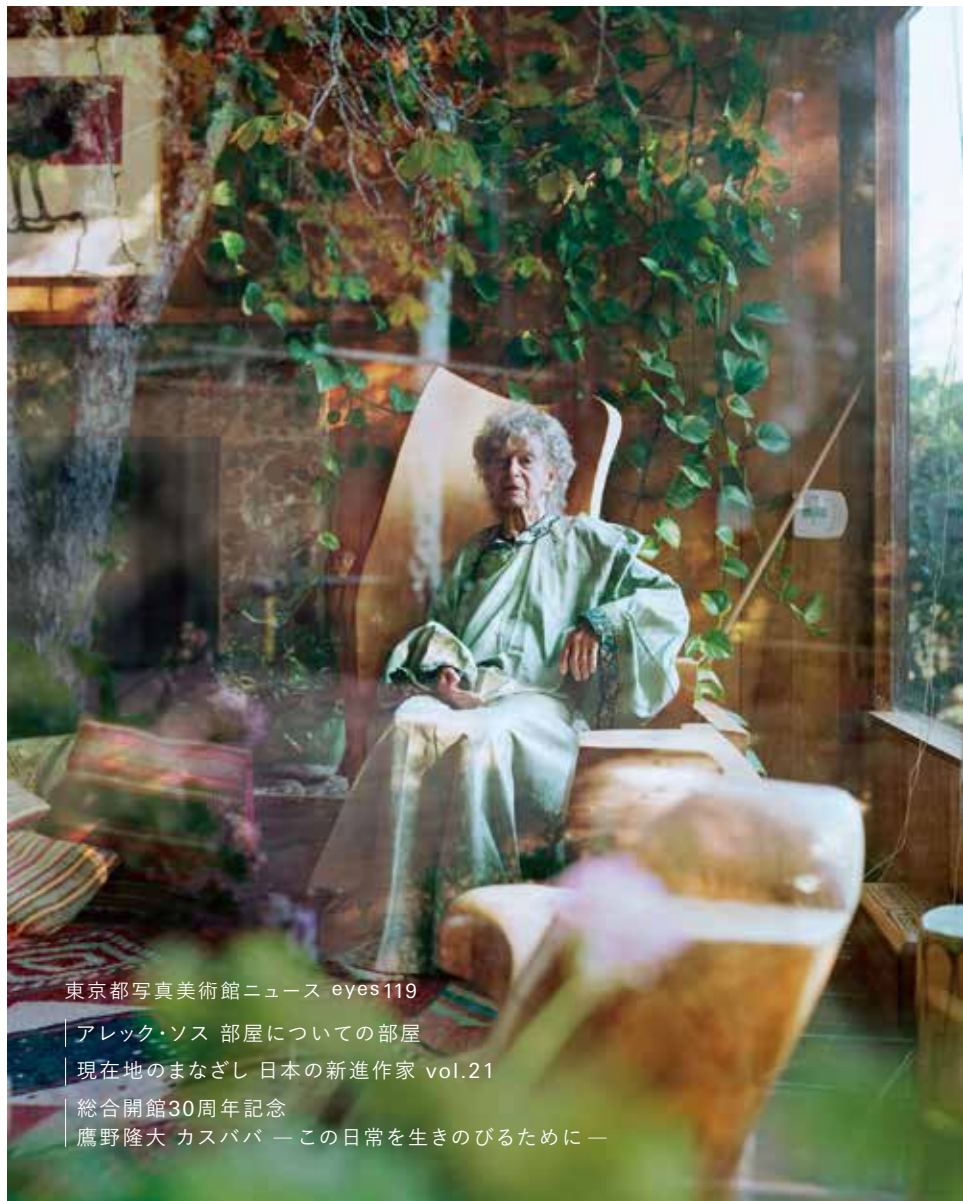


# TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース eyes119

アレック・ソス 部屋についての部屋

現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21

総合開館30周年記念

鷹野隆大 カスパバー この日常を生きのびるためにー

# アレック・ソス 部屋についての部屋

INTERVIEW

## Alec Soth: A Room of Rooms

アレック・ソスは、アメリカを代表する写真家であり、生まれ育ったアメリカ中西部などを題材とした、写真で物語を紡ぎだすような作品で、世界的に高い評価を受けてきました。初期の代表作〈Sleeping by the Mississippi〉から最新作〈Advice for Young Artists〉までを一堂に展示する、「部屋についての部屋(A Room of Rooms)」と題された本展について、お話をうかがいました。

### Alec Soth

アレック・ソス

1969年アメリカ・ミネソタ州ミネアポリス生まれ。現在も同地を拠点に活動。これまでに、『Sleeping by the Mississippi』(Steidl、2004年)、『A Pound of Pictures』(MACK、2022年)など、数多くの作品集を出版。「Gathered Leaves: Photographs by Alec Soth」(サイエンス・ミュージアム、ロンドン、2015年)、「アレック・ソス Gathered Leaves」(神奈川県立近代美術館 葉山、2022年)など世界各地で展覧会を開催している。2004年に国際的な写真家集団「マグナム・フォト」に参加し、2008年より正会員。2008年から出版や教育活動を行うレーベル「Little Brown Mushroom」を主宰。



撮影：藤澤卓也

「部屋」がテーマとして掲げられていますが、今回の展覧会でどのように展開されていますか？

過去の作品を振り返るだけの回顧展ではなく、テーマを設けたいと考えていました。そこで、時系列の流れにはとどまらない捉え方があるのではないかと考え、自身が内なる空間、内なるものに着目した写真家である点にフォーカスを当てることにしました。また、「部屋についての部屋(A Room of Rooms)」というアイデアは、カメラそのものが一つの「部屋」として機能し、レンズは窓のように外を映し出すという発想から生まれました。

デビュー作〈Sleeping by the Mississippi〉やそれ以前の作品が展示された一つの部屋から、あなたのその後の作品にも通底するキーワードの一つである「夢」の世界へと誘われました。

そうですね。すぐそばをミシシッピ川が流れているけれど、あなたはベッドの中にいて、夢の中でミシシッピ川を思い描いているような作品です。写真は現実を正確に伝えるだけのものではありません。ストイックなドキュメンタリーではなく、本作ではそこに住む人たちの夢や想像力を捉えたかったのです。

〈Sleeping by the Mississippi〉の撮影時、

被写体に自身の夢を書いてもらったそうですね。黒い犬と一緒に写る男性のポートレート写真では、テーブルの上に紙とペンが置かれています。そこには彼の夢が書かれているのでしょうか？

その通りです。うっかり残してしまっていました。ここには確か「このままの姿で100歳まで生きたい」というようなことが書かれていたのですが、悲しいことに、彼は10年ほど前に亡くなりました。このように時間の中に印を残すことができるのが、写真のすごさだと思います。若い頃は、写真において経験や新しい出会いがすべてでした。でも歳を重ねた今は、過去の写真を見ると月日の流れを意識するようになりました。別の部屋で展示している〈A Pound of Pictures〉は、その感覚について掘り下げた作品です。

そのような感覚が研ぎ澄まされることで、本展に含めることにした作品はありますか？

例えば、二つ目の部屋に展示している、駆け出しの頃に撮影したモノクロの作品がそうです。バーで男女



〈Cherry, Nye's Polonaise Room, Minneapolis, Minnesota〉  
〈Looking for Love〉より 1995年 作家蔵 ©Alec Soth

表紙図版)〈Anna, Kentfield, California〉〈I Know How Furiously Your Heart is Beating〉より 2017年東京都写真美術館蔵 ©Alec Soth



〈Lenny, Minneapolis, Minnesota〉〈Sleeping by the Mississippi〉より 2002年 作家蔵 ©Alec Soth

が出会うシーンや結婚式の後のセルフ・ポートレートを、今回のように自由に混ぜる発想は30年前には持ち合わせていませんでした。

当時は無意識だったことに対して、時間が経ち特別な意味を見出すことはありますよね。あなたの作品にとって「部屋」は昔から重要な要素だったのでしょうか？

実は母がインテリアデコレーターだったこともあり、幼い頃から空間との関わりが深くありました。写真を通して、人々が住む空間を描写する中で、そこに宿る物語や痕跡を掘り下げることが自分の作品の核になっています。私はきっとスタジオで制作するのが向いているのですが、

どういわけか、私の作品に活力を与える唯一の方法は外の世界に出ていくこと。被写体の家族や生活空間に入り込むことで物語や感情を写真に込めることができるのです。

### ウィリアム・エグルストンやスティーブン・ショアなど、あなたに大きな影響を与えた存在たちのポートレートも展示された意図とは？

エグルストンやショアからの影響は明確かと思えます。ナン・ゴールディンはわかりにくいかもしれませんが、彼女の写真には感情や思いが込められています。そしてボリス・ミハイロフにはユーモアや自己風刺があります。私の作品はよく「静かなもの」というイメージを持たれることが多いのですが、そうしたユーモアの要素は私の中にもあると思っています。

若い頃、彼らと想像の中で日々交流しながら刺激を受けていましたが、彼らと実際に会うのはそれ

とは異なる体験でした。彼らが自身の空間にいる姿を写真に収めることで、自分と彼らとの差異を実感し、彼らの確立された個性に対する敬意を持つようになりました。本展は、彼らを「部屋」の中に招き入れる格好の機会だと思ったんです。また、時が流れ、今では彼らとの関係が変わったと感じます。このような作品を制作したことが、最新作〈Advice for Young Artists〉にも繋がっています。アドバイスもなければ、決まった道もない。ただ自分自身で道を切り開くしかないのです。

### 2004年に北京で撮影した未発表の写真が含まれるなど、この展覧会にはサプライズの要素が散りばめられていますね。

中国の写真は、野球用語で言うなら「カーブボール」みたいなものですね(笑)。私は写真集を制作する上で、驚きの瞬間を作ることを大事にしています。ページをめくった時に「えっ、何これ?」と困惑するような感覚です。また、私といえば「アメリカ



左)《Two Towels》〈Niagara〉より 2004年 作家蔵 ©Alec Soth  
右)《Untitled 07》〈Dog Days, Bogotá〉より 2003年 東京都写真美術館蔵 ©Alec Soth



の写真家」という一般的なイメージを覆すようなものも含めたいと思いました。

### 地理的な枠組みについて意識されますか？

初期作品の〈Sleeping by the Mississippi〉や〈Niagara〉を制作していたときは、入り口をわかりやすくするために、地理的な枠組みの中で作品を構築する必要性を感じていました。キャリアが長くなると、キャリア全体を通じて作品を楽しんでもらえるという利点が生まれます。その結果、作品の構造をより抽象的にする自由が得られるようになりました。〈Broken Manual〉は、アメリカが舞台ではありますが、地理的な枠組みではなく、「マニュアル」というコンセプトによって構成されているんです。

### 三つ目の部屋に展示されたアメリカを舞台にした〈Songbook〉、〈Broken Manual〉とパーソナルな作品〈Dog Days, Bogotá〉の組み合わせもとても興味深かったです。

この部屋は私の三つの全く異なる側面を見せていると思います。〈Songbook〉はより社会的で、世界とのつながりが強く、その一方で〈Broken Manual〉は、私自身や心理的な部分をより深く掘り下げた作品です。私は個人的な作品や家族写真

が好きなのですが、自分では撮ることができません。でも、〈Dog Days, Bogotá〉は私がそれに最も近づいた作品だと思います。

私の作品において、一方には世界を探究するドキュメンタリーがあり、もう一方には内省的な作品があります。〈Sleeping by the Mississippi〉や〈Niagara〉はそのちょうど中間に位置する作品と言えるでしょう。そして〈Broken Manual〉では、さらに内面へと深く向き合いました。しかし、その後、〈Songbook〉でそれに反動を起こしました。どこか一つの場所に落ち着くことはなく、その間を歩き来しているような感覚で制作を続けています。

### 被写体が暮らす部屋を訪ねて世界各地を巡ったポートレートシリーズ〈I Know How Furiously Your Heart is Beating〉が転換点とされる理由は何ですか？

それまで重要視していた内外の二項対立が崩れ、すべてがつながり合っているという感覚に至ったように感じました。ある種の精神的な体験によって、「すべてが同じ空間に存在している分子に過ぎない」という感覚を覚えたんです。本展では、このシリーズだけで一つの部屋を構成したのですが——実際に足を踏み入れたときに軽やかで、しかし同時に深いものも感じられ、とても美しいと思いました。でも、以降はその感覚を持続することはでき



《Still Life II》〈Advice for Young Artists〉より 2024年 作家蔵 ©Alec Soth

ず、再び自分の中に二項対立の構造が戻ってきたのですが、以前よりも縛られることが少なくなりました。今回は2点のみ展示している〈A Pound of Pictures〉というシリーズも、従来の構造から解放され、とても自由な方法で制作しました。この作品は、私にとって写真という媒体や、これまでのキャリア、そして自分自身を振り返る「始まり」のようなシリーズでもあります。

### 最新作〈Advice for Young Artists〉のテーマは何ですか？

この作品では「自己受容」が中心テーマとなっています。若いアーティストへのアドバイスという形式を取りながらも、自分が若い頃に持っていた創作の情熱を取り戻そうと試みました。〈Broken Manual〉ともつながりがあり、自分自身を笑い飛ばしていくようなユーモアがあります。自身の抽象的な心の中に向き合い、そうした精神風景を描き出しているんです。

(インタビュー・構成 東直子)



〈Amalia〉〈Advice for Young Artists〉より 2023年 作家蔵 ©Alec Soth



「アレック・ソス 部屋についての部屋」展 展示風景 撮影：高橋健治

## アレック・ソス 部屋についての部屋

Alec Soth: A Room of Rooms

2F 2024.10.10|木| - 2025.1.19|日|

アメリカ・ミネソタ州生まれの写真家アレック・ソス(1969-)は、国際的な写真家集団、マグナム・フォトの正会員であり、生まれ育ったアメリカ中西部などを題材とした、写真で物語を紡ぎだすような作品で、世界的に高い評価を受けてきました。

本展「部屋についての部屋(A Room of Rooms)」には、初めて出版されたシリーズであり、初期を代表する〈Sleeping by the Mississippi〉から、今秋刊行の最新作〈Advice for Young Artists〉まで出品されます。30年に及ぶソスの歩みを単に振り返るのではなく、選ばれた出品作品のほぼすべてが屋内で撮影されているように、「部屋」をテーマにこれまでのソスの作品を編み直す、当館独自の試みとなります。

出品作品の一つに〈I Know How Furiously Your Heart is Beating〉というシリーズがあります。アメリカの詩人、ウォレス・ステューヴンズ(1879-1955)の詩「灰色の部屋(Gray Room)」の一節からタイトルがとられた本作は、2019年に同名の写真集としてまとめられ、ソスのキャリアにおいて一つの転換点となっています。初期からソスはアメリカ国内を車で旅し、風景や出会った人々を大判カメラで撮影してきましたが、本作ではそうしたロードトリップのスタイルではなく、舞踏家・振付家のアンナ・ハルプリン(1920-2021)や、小説家のハニヤ・ヤナギハラ(1974-)など世界各地に様々な人々を訪ね、その人が日々を過ごす部屋の中で、ポートレートや個人的な持ち物を撮影しています。すなわち、部屋とそこに暮らす人をテーマとするこのシリーズが、本展を生み出すきっかけと



〈Crystal, Easter, New Orleans, Louisiana〉〈Sleeping by the Mississippi〉より 2002年 作家蔵 ©Alec Soth

なりました。

〈I Know How Furiously Your Heart is Beating〉では、静謐な空間で被写体から醸し出される親密さが大きな魅力となっています。「どれだけ激しくあなたの心臓が鼓動しているのか知っている」というタイトルは、その瞬間を写し留めたソスの胸中だけではなく、展示室という一つの部屋の中で、作品と対峙するわたしたちの心の内までも言い表しているかのようです。

「ポートレートや風景、静物などを定期的に撮影しているが、最も親しみを感じるのには室内の写真だ」と作家は述べています。ソスの作品に登場する様々な部屋や、その空間にたたずむ人々に意識を向けることで、果たして何が見えてくるのか。展覧会と写真集共に多くの支持を得る作家の表現の魅力を探ります。

▶担当学芸員によるギャラリートーク

1.10(金) 14:00-(手話通訳付き) ※当日有効の本展チケットまたは無料対象の方は証明書等のご提示が必要です。

【観覧料】 一般800円 ほか 各種割引あり ※1.2(木)、3(金)は無料

※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ウェブサイトをご覧ください。

【主催】 東京都写真美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)

【協賛】 東京都写真美術館支援会員

※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。



# 現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21

The Gaze of the Present: Contemporary Japanese Photography vol.21

3F 2024.10.17|木| - 2025.1.19|日|

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するために、新しい創造活動の展開の場として「日本の新進作家」展を2002年より継続して開催しています。21回目となる本展では、社会、環境、人と人との関係性を自身の立ち位置から問い直し、写真を通して世界の断片を提示する5名の作家たちの試みを紹介します。

私たちは、これまで当たり前と感じていた価値観が揺らぐような数々の出来事に直面し、変化のある時代に生きています。写真表現も、技術の進歩と普及、表現手法の多様化にともない、その環境は激変しています。本展の出品作家たちは自身の感性にしたがって世界と向き合い、独自の視点で思考を深めて作品として提示します。表現する手法として写真を選びとり、しなやかなまなざしで現実をとらえる作家たちの作品は、現在を生きる私たちにいつもとは少し異なる角度から世界を見る視点を与えてくれます。5名の作家たちの多様な試みを通して、今日の、そしてこれからのまなざしの可能性を改めて見つめる契機となることでしょうか。



大田黒衣美《sun bath》2023年 作家蔵 ©Emi Otaguro

## 大田黒衣美 Otaguro Emi

福岡県生まれ。東京造形大学美術学科絵画科専攻卒業、東京藝術大学大学院修士課程油画科修了。生物や日用品など、私たちの身の回りにある物を作品の素材として使用し、写真や絵画、彫刻を制作している。本展では、人物の形にかたどられたチューインガムを猫の毛の上のせて撮影した作品など、新作を含めた《sun bath》シリーズを展示。画面のなかでは、猫は動かず、ガムは朽ちることがなく、時間は留められている。また、写っている色や形の重なりからは、日光浴の風景のようなあたたかな感触が伝わってくるようである。

## かんのさゆり Kanno Sayuri

宮城県生まれ。東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コース(現 映像学科)卒業。宮城県に生まれ、現在も同地にて活動。主に風景写真を制作し、本展では《New Standard Landscape》シリーズを、新作を交えて紹介。かんの写真に写る風景は、一見ただけではどこで撮られたのかを判断することは難しい。しかし、じっくりと作品を見ているうちに、東日本大震災の影響を受けた、東北の風景であると感じてくだろう。かつてそこにあった家や見慣れた風景がなくなった土地には、新しい風景が現れている。

かんのさゆり《New Standard Landscape》より 2022年- 作家蔵 ©Sayuri Kanno



【観覧料】一般700円 ほか 各種割引あり ※1.2(木)、3(金)は無料

※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ウェブサイトをご覧ください。

【主催】東京都写真美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)／東京新聞 【協賛】東京都写真美術館支援会員



## 千賀健史 Chiga Kenji

1982年滋賀県生まれ。2008年大阪大学基礎工学部卒業。緻密で長期間にわたるリサーチを経て、ドキュメンタリーの視点と虚実を混ぜたイメージを作り出し、現実の社会問題をあぶりだす作品を制作。本展では、2019年からリサーチを続ける特殊詐欺をテーマにした作品を展示。洗練された画面には、作家の綿密な調査によって作り出された虚像と現実が多層に織り込まれ、人間の思考や衝動が写し出されている。

展示風景 撮影:守屋友樹



## 金川晋吾 Kanagawa Shingo

1981年京都府生まれ。2006年神戸大学発達科学部人間発達科学科卒業、2015年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人と人との関係や距離感を冷静なまなざしでとらえ写真やテキストで表現する金川。本展で紹介する、失踪を繰り返す父を撮影した代表作《father》、そして金川自身の共同生活を撮影した《明るくていい部屋》には、可変的な人間関係と、一般的な概念や役割にとらわれない、個と個の距離と関係性が切り取られている。

金川晋吾《father》より 2009年 作家蔵 ©Shingo Kanagawa



## 原田裕規 Harada Yuki

1989年山口県生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。とるにたらない視覚文化をモチーフに作品を制作している。本展出品作では、持ち主を失った写真に着目。作者が24時間にわたり写真を眺める様子を映した映像《One Million Seeings》と、観客が写真を直接手にとって鑑賞することができる《写真の山》では、かつて誰かが見た光景を通じて、見るものが持つ記憶を喚起させる。

原田裕規《写真の山》2017年-現在 展示風景 撮影:守屋友樹

### 関連イベント

- ▶ 出品作家とゲストによるトーク  
2025.1.18(土) 15:00-17:00  
大田黒衣美(出品作家)×原田裕規(出品作家)×中村史子(大阪中之島美術館主任学芸員)
- ▶ 出品作家による上映 金川晋吾 新作上映  
2025.1.11(土) 15:00-

【会場】東京都写真美術館 1階ホール  
【定員】190名(整理番号順入場/自由席)  
【参加費】無料

- ▶ 担当学芸員によるギャラリートーク  
1.3(金)14:00-
- ※当日有効の本展チケットまたは無料対象の方は証明書等のご提示が必要です。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。



# 総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスババ —この日常を生きのびるために—

TOP 30th Anniversary Takano Ryudai: kasubaba Living through the ordinary

2F 2025.2.27|木| - 6.8|日|



《2002.09.08.M.#b08》〈立ち上がれキクオ〉より 2002年

鷹野隆大(1963-)は写真集『IN MY ROOM』(2005)で第31回木村伊兵衛写真賞を受賞し、現在も国内外で活躍を続ける写真家、アーティストです。鷹野は『IN MY ROOM』に代表されるセクシュアリティをテーマとした作品と並行し、〈毎日写真〉や〈カスババ〉といった日常のスナップショットを手がけ、さらに東日本大震災以降、「影」を被写体とした写真の根源に迫るテーマにも取り組んでいます。本展のタイトルである〈カスババ〉とは鷹野による造語で、カスのような場所(バ)の複数形です。

大規模な自然災害や感染症の世界的流行、経

済発展による環境破壊や都市開発など、私たちは急速な時代の変化の渦中を生きています。鷹野は美しいものだけではない現実を受け入れ、弱いものもみにくいものそのまま、むき出しのイメージを見る者へ提示します。私たちは、身近でありながら目を凝らして見ることのない、自身が生きる日常の豊かさや混雑を、鷹野の作品を通してあらためて目にするでしょう。初公開作品を含め鷹野の軌跡を概観する本展が、出口が見えなくなりつつあるこの日常を生きのびるヒントとなれば幸いです。

【観覧料】一般700円 ほか 各種割引あり

※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ウェブサイトをご覧ください。

【主催】東京都／東京都写真美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)



## 関連イベント

- ▶ 出品作家とゲストによる対談  
3.15(土) ゲスト:岡真理(現代アラブ文学研究者、早稲田大学教授)
- 4.5(土) ゲスト:北川一成(デザイナー、GRAPH代表取締役)
- 5.3(土) ゲスト:丹尾安典(雑学雑誌、早稲田大学名誉教授)
- 5.24(土) ゲスト:倉石信乃(詩人、批評家、明治大学教授)

【時間】15:00-16:30

【会場】東京都写真美術館 1階ホール

【定員】190名(整理番号順入場/自由席)

【参加費】無料

※当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布します。

## ▶ 担当学芸員によるギャラリートーク

3.7(金)14:00-

4.4(金)14:00-(手話通訳付き)

5.2(金)14:00-(手話通訳付き)

※当日有効の本展チケットまたは無料対象の方は証明書等のご提示が必要です。

1 《2023.03.24.sc.#048》〈CVD19〉より 2023年

2 《2015.10.28.#a28》〈カスババ2〉より 2015年

3 《2012.08.12.#b30》〈毎日写真〉より 2012年

4 《2019.12.31.P.#02(距離)》〈Red Room Project〉より 2019年

5 《レースの入った紫のキャミソールを着ている(2005.01.09.L.#04)》〈IN MY ROOM〉より 2005年

※図版はすべて ©Takano Ryudai, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

※事業は諸般の事情により変更することがございます。  
最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。



# APA アワード 2025

## 第53回公益社団法人日本広告写真家協会 公募展

**B1F** 2025.2.22|土| - 3.9|日|

# APA AWARD 2025

APAアワードは1961年より開催されている歴史ある写真の公募展で、これまで著名な写真家を数多く輩出してきました。「広告作品部門」は実際に世の中に流通した広告写真から審査し選出。「写真作品部門」はテーマに沿って自由な発想と写真表現で競い合う写真コンペです。今年度のテーマは「愛と平和」。これからの写真を見据える入賞入選作品を紹介します。

[観覧料] 一般500円 ほか 各種割引あり  
[主催] 公益社団法人日本広告写真家協会 (APA)  
[共催] 東京都写真美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)  
[後援] 経済産業省 / 文化庁 / 東京都

〈お問い合わせ〉公益社団法人日本広告写真家協会事務局  
TEL: 03-5545-5015 MAIL: kouboten@apa.or.jp  
〈公式サイト〉<https://apa.or.jp/award2025/>



※事業は諸般の事情により変更することがございます。  
最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。

## ロバート・キャパ展 (仮) Robert Capa Exhibition (Tentative)

**B1F** 2025.3.15|土| - 5.11|日|

キャパの仕事は、1930年代、世界恐慌で大混乱する社会状況に眼をむけることからはじまりました。スペイン内戦、中国の抗日戦争、第二次世界大戦で北アフリカ、イタリア、ノルマンディーなどで連合国側がナチス・ドイツへの激しい反攻で解放した欧州、イスラエル建国時の中東戦争、自らが地雷で落命した仏領インドシナの独立戦争まで……。激動の現場に命がけで立会いすぐれた写真を数多く遺しました。そこには戦争に苦しむ人々への共感、やさしさやユーモアなどがありました。40歳までの短くも太い人生で、さまざまな土地、出来事、人びとに出会って貫いた「福縁随処」の生きざまと写真表現を回顧します。



ロバート・キャパ《オマハ・ビーチに上陸するアメリカ軍の先陣部隊、ノルマンディー海岸、フランス、1944年6月6日》東京富士美術館蔵

[観覧料] 一般1,200円 ほか 各種割引あり  
[主催] クレヴィス [共催] 東京都写真美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)  
[協力] 東京富士美術館



※事業は諸般の事情により変更することがございます。  
最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。

〈お問い合わせ〉クレヴィス MAIL: [info@crevis.jp](mailto:info@crevis.jp)

TOP 30th Anniversary

# Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2025

15 DAYS

PROJECT Project Description Date Project Contacts Documents and Board Notes

# DOCS:



これはイメージです

# Images and Records

31 Jan — 16 Feb 2025

総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—

TOP 30th Anniversary Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2025 Docs: Images and Records

会期\_2025年1月31日(金)~2月16日(日)[15日間] 月曜休館 ※コミッション・プロジェクト(3F展示室)のみ3月23日(日)まで

会場\_東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス各所、地域連携各所ほか

時間\_10:00~20:00(1月31日~2月15日/最終日16日は18:00まで) ※入館は閉館の30分前まで

※2月18日~3月23日のコミッション・プロジェクトは、10:00~18:00(木・金は20:00まで)

入場無料 ※一部のプログラム(上映など)は有料

[主催] 東京都 / 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 / 日本経済新聞社  
[共催] サッポロ不動産開発株式会社 / 公益財団法人日仏会館  
[後援] J-WAVE 81.3FM [協賛] サッポロビール株式会社 / 東京都写真美術館支援会員

# TOP MUSEUM

# 支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、  
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただいています。

《特別賛助会員》  
キヤノン(株)  
全日本空輸(株)  
(株)ニコン

《賛助会員》  
キヤノンマーケティングジャパン(株)  
(株)資生堂  
大日本印刷(株)  
TOPPANホールディングス(株)  
富士フイルム(株)

《特別支援会員》  
アサヒグループホールディングス(株)  
サッポロ不動産開発(株)  
サッポロホールディングス(株)  
東急建設(株)  
ピクテ・ジャパン(株)

《支援会員》  
あいおいニッセイ同和損害保険(株)  
(株)アイネスト  
アイング(株)  
アオイネオン(株)  
(株)アクト・テクニカル  
サポート  
(株)浅沼商会  
(株)朝日工業社  
朝日新聞社  
(株)朝日新聞出版  
朝日生命保険(相)  
(有)アスペン/POLARIS  
(株)アフロ  
(株)アマナ  
(株)岩波書店  
(株)潮出版社  
(株)栄光社  
(株)エージービー  
(一財)AVCC・震が関ナレッジスクエア(KK<sup>2</sup>)  
SMBc日興証券(株)  
SB C&S(株)  
(株)NHKエデュケーション  
(株)NHKエンタープライズ  
(株)NHK出版  
(株)NHKテクノロジーズ  
ENEOSホールディングス(株)  
エルメス財団

OMデジタルソリューションズ(株)  
カールツァイス(株)  
花王(株)  
鹿島建設(株)  
(株)KADOKAWA  
カトーレック(株)  
神奈川新聞社  
カメラショップ(株)  
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)  
(株)キクチ科学研究所  
(株)キタムラ  
キックマン(株)  
(株)紀伊屋書店  
ギャラリー小柳  
共同印刷(株)  
(一社)共同通信社  
空港施設(株)  
(株)久米設計  
グローリー(株)  
(株)ケー・アンド・エル  
グッティイメージズジャパン(株)  
興亜硝子(株)  
(株)弘亜社  
(株)公栄社  
(株)廣済堂  
(株)講談社  
(株)光文社  
(株)国書刊行会  
(株)コスモスインターナショナル  
小山登美夫ギャラリー(株)  
佐川印刷(株)  
三愛オプリー(株)  
産経新聞社  
サントリーホールディングス(株)  
(株)ジェイアール東日本企画  
JSR(株)  
(株)JTb  
(株)シグマ  
(株)実業之日本社  
信濃毎日新聞社  
清水建設(株)  
(株)写真弘社  
写真の学校/東京写真学園  
チャンネル(同)  
(株)集英社  
シュッピン(株)  
(株)小学館  
松竹(株)  
信越化学工業(株)

(株)新潮社  
(株)晋遊舎  
(株)スタジオエムジー  
(株)スタジオジブリ  
(株)SUBARU  
住友生命保険(相)  
(株)住友倉庫  
(株)生活の友社  
セイコーグループ(株)  
双日(株)  
ソニーグループ(株)  
損害保険ジャパン(株)  
第一生命保険(株)  
台新国際商業銀行  
大和証券(株)  
(有)タカ・イシイギャラリー  
(株)高島屋  
(株)竹中工務店  
(株)タニタ  
(株)タムロン  
(株)丹青社  
(株)中央公論新社  
中外製薬(株)  
(株)TBSテレビ  
(株)テレビ朝日  
(株)テレビ東京  
(株)電通  
東亜建設工業(株)  
東映(株)  
(株)東京印書館  
東京工科大学/日本工学院  
東京工芸大学  
東京新聞・中日新聞社  
(株)東京スタディオ  
東京造形大学  
東京総合写真専門学校  
(株)東京ダイケンビルサービス  
東京建物(株)  
東京地下鉄(株)  
東京テアトル(株)  
東京都競馬(株)  
(株)東京ニュース通信社  
専門学校東京ビジュアル  
アーツ・アカデミー  
(株)東京美術倶楽部  
東京メトロポリタンテレビ  
ジョン(株)  
(株)東芝  
東宝(株)  
(株)東北新社  
(株)東洋経済新報社

(株)徳間書店  
戸田建設(株)  
(株)トロンマネージメント  
(株)ニコンイメージングジャパン  
日油(株)  
日活(株)  
日機装(株)  
日光ケミカルズ(株)  
日本貨物航空(株)  
日本空港ビルデング(株)  
日本経済新聞社  
(株)日本廣告社  
(公社)日本広告写真家協会  
日本写真印刷コミュニケー  
ションズ(株)  
(有)タカ・イシイ協会  
(公社)日本写真協会  
日本写真芸術専門学校  
日本生命保険(相)  
日本大学芸術学部  
(株)日本デザインセンター  
(株)ニッポン放送  
日本レコードマネージメント(株)  
日本ロレックス(株)  
野村證券(株)  
(株)博報堂  
(株)博報堂DYメディア  
パートナーズ  
(株)博報堂プロダクツ  
(株)ハーツ  
パナソニックホールディングス(株)  
(株)パラゴンホールディングス  
(株)バンダイナムコフィルム  
ワークス  
ぴあ(株)  
北海道 写真の町東川町  
(株)美術出版社  
(株)ビックカメラ  
(株)ピラミッドフィルム  
(株)ファーストリテイリング  
(株)フェドラ  
(株)富士通パーソナルズ  
(株)フジテレビジョン  
(株)フジヤカメラ店  
芙蓉総合リース(株)  
(株)フレームマン  
プロフォト(株)  
(株)文化工房  
(株)文藝春秋  
北海道新聞社  
(株)ホテルオークラ東京

本田技研工業(株)  
毎日新聞社  
丸善雄松堂(株)  
マルミ光機(株)  
(株)マンダム  
(株)みずほ銀行  
三井住友海上火災保険(株)  
三井倉庫ホールディングス(株)  
三井不動産(株)  
三菱製紙(株)  
三菱電機(株)  
明治安田生命保険(相)  
森ビル(株)  
ヤマト運輸(株)  
(株)吉野工業所  
(株)ヨドバシカメラ  
読売新聞社  
ライオン(株)  
ライカカメラジャパン(株)  
(株)リビタ  
(株)良品計画  
(株)ロボット  
(株)ワコウ・ワークス・オブ・  
アート  
(株)ワコール

支援会員の  
詳細は  
こちら▼  


2F SHOP  
ミュージアム・  
ショップ

NADIFT  
BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・  
ショップ。TOPMUSEUMのシンボルマークを使ったオリジナルグッズ  
が新登場! シンプルながらも落ち着いたデザインは、普段使いし  
やすくおすすめです。日常の中でさりげなくTOPMUSEUM好きを  
アピールしてみたいかたがでしょう。

TOPMUSEUMオリジナル  
トートバッグ 3,300円(税込)  
大判ハンカチ(white/black) 各1,650円(税込)  
アクリルキーリング(silver/black) 各880円(税込)



詳細  
ページは  
こちら▼



[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)  
[TEL] 03-6447-7684  
[定休日] 美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。

1F CAFE  
カフェ

フロムトップ

台湾で人気の屋台飯、ルーロー飯をワンプレートをご用意してい  
ます。カラーゲンたっぷりの皮付きの豚肉にこんにやくを加えた食  
感楽しいルーロー飯に色鮮やかな野菜を添えました。コーヒーま  
たは日本茶付き1,600円(税込)。



詳細  
ページは  
こちら▼



[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)  
[TEL] 070-8591-3730  
[定休日] 美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。





	3F	2F	B1F	1F
2024 10 11 12	現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21 (企) 10.17(木) - 2025.1.19(日)	アレック・ソス 部屋についての部屋 (企) 10.10(木) - 2025.1.19(日)		
2025 1 2	総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです— 1.31(金) - 2.16(日)			
3	3階展示室のみ 3.23(日)まで	総合開館30周年記念 鷹野隆大 カスパー—この日常を 生きのびるために— (収) 2.27(木) - 6.8(日)	APAアワード2025 (誘) 2.22(土) - 3.9(日)  ロバート・キャバ (誘) 3.15(土) - 5.11(日)	東京都内の美術館・ 博物館等をお得に見られる 「ぐるっとパス」 ▼詳細はこちら▼ 

(企) 企画展 (収) 収蔵展 (誘) 誘致展

## 手話通訳付き ギャラリートークを開催しています

### 「アレック・ソス 部屋についての部屋」2025.1.10(金)

14:00～、参加費無料。どなたでもご参加いただけます。

※別途展覧会チケットが必要です。展覧会無料対象の方は各種証明書をご提示ください。

### この日は「TOPボランティアによる鑑賞サポート」も実施しています。

TOPボランティアが館内の案内や展覧会を見るサポートをします。筆談、読み上げ、視覚支援機器の貸出など。それぞれのスタイルで美術館を楽しみませんか。(1回30分程度)

[時間] 13:30 - 17:30 (最終受付17:00) [利用料] 無料 [受付] 1Fスタジオ

学芸員が手話通  
訳者をまじえて、  
展覧会の見どころ  
をわかりやすく  
解説します。



## 東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099 [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

開館時間 10:00 - 18:00 (木・金は20:00まで。ただし1/2(木)、3(金)は18:00まで) ※入館は閉館30分前まで。

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始(12/29 - 1/1)、臨時休館日(1/20 - 1/30)

東京都写真美術館ニュース「アイズ2024」119号 □発行日：2024年12月24日 □企画・編集：東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本：株式会社公栄社 □発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2024 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、消費税込みの価格です。事業は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はウェブサイトをご覧ください。